# 増える外国人 悩む医療現場

## 制度、宗教、文化 トラブルの種

政府が高度な医療で外国人を呼び込む「医療ツーリズム」を推進したことなどを背景に、外国人が医療機関を受診する機会が増えている。ただ、制度や宗教、文化の違いからトラブルとなることも少なくない。入管難民法改正で来春以降、外国人労働者の受け入れが拡大されれば、医療現場の混乱も広がりそうだ。受け入れ態勢を模索する二つの病院を取材した。（井上真由美）

## 治療内容や費用 意思疎通に腐心

「初めまして。痛みはありますか」「今は大きな痛みはありません」。10月中旬、福岡市城南区の福岡大病院（915床）の泌尿器科外来を、中国人の会社経営者（41）が受診した。医師と、看護師でもある国際医療戦略室の西山道代室長（60）、通訳とコーディネートを請け負う会社「トップ九州」の斎藤寧々代表（42）らが同席。斎藤さんが診察を通訳し、血液検査などにも終日、付き添った。

男性は中国で、腎臓に尿がたまって拡張する「水腎症」と診断された。納得のいく治療を受けられず再発の不安が募り、訪日を決意。受診予約や宿泊などはトップ九州が仲介した。

11月上旬にも来日し、詳しい検査を受けた。「当面は経過観察で良い」との診断に納得し、来年2月の再診を予約して帰国。男性は「診察が丁寧で設備も良い。友人にも勧めたい」と話した。

福大病院の外国人患者は2017年度が55人、18年度は11月末現在ですでに88人と増加。医療保険が適用されない外国人は、医療費は全額自己負担で、コンサルテーション料（一律4万円）も負担してもらう。質の高い医療に出費を惜しまない富裕層が増える一方で、旅行保険未加入の旅行者なども目立ち、医療費の支払いや意思疎通で混乱が生じている。

16年に戦略室を新設してトップ九州と提携。院内で通訳養成講座を開くなど、人材育成にも力を入れるが、外国人増加への不安は尽きない。医療通訳は語学力と専門知識を求められるため、斎藤さんは「福岡はまだ人材が不足している。医療ツーリズムを充実させるなら、質の高い通訳を養成すべきだ」と指摘。西山さんは「医療機関としては診療を拒否する選択肢はない。外国人を受け入れる以上、態勢を整え、ニーズに応えたい」と話す。

↑ ↑

中国人の男性（左）の診察に付き添う斎藤寧々さん（右前）と、国際医療戦略室の西山道代室長（右奥）＝10月中旬、福岡大病院